

出エジプト19:1~20:22 民数記28:19~25  
第二サムエル22:1~51 第一コリント5:1~8

七週の祭り (シャブオット・ペンタコステ)を迎えて

最近、メシアニック・ムーブメントとともに、ヘブライ的信仰の回復と聖書の理解をユダヤ的観点から見直そうとする働きがあることは、大変喜ばしいことであると思うのである。しかし、このような働きが進む中で、我々は、ユダヤ人と異邦人との間には、区別があると解釈している、二つの神学(Two ways Theology)と言うものが、多くのプロ(親)・イスラエルのクリスチャンの間に浸透している。

そのような考え方は、トーラーはユダヤ人だけが守るもので、異邦人とは関係がないと考えていることである。しかし、メシアニック・ムーブメントに深く関わっている人々の間にも、トーラーは異邦人も守るべきであると教えながら、どうしても、トーラーからの教えとユダヤの伝統というものと区別ができないときもある。

レビ記23章には、主の例祭について記されているが、多くのクリスチャンは、このような例祭が、ユダヤ人の例祭と思っている人が多いである。また、メシアニック・ムーブメントに関わる人々も、そのように考えている人もいる。そのような人々は、主の例祭を、ユダヤ人の例祭(Jewish Festivals)と読んでいる。しかし、聖書どこにも、ユダヤ人の例祭とかユダヤ人の祭りというものはない。あくまでも、主の例祭であり、主の祭りである。

主イエスが昇天されてから約2000年近く、教会の歴史の中で、聖書的戒め、例祭、御教えなどが失われつつ、新しい文化と伝統という土壌の中で、変化して来たことは否定できないことである。最初から、ローマカトリックによって、ギリシアとローマの文化と伝統の化粧を塗り付け、本来の聖書的すがたを失ったのである。それは、今でも、アメリカをはじめ、西洋の諸国からくる様々な新しい化粧術によって続いている現状である。

聖書歴のシヴァンの月(太陽暦の5~6月)の六日は、七週の祭りと言われる、Shavuot(שבועות)の日である。使徒の聖書(新約聖書)では、ギリシア語でペンテコステ(五旬節)と読んでいる。レビ記23章によると、この祭りは、過越しの祭りの際に、安息日の翌日にオメル(束)を神殿にもってくるときから数えて50日目になる日に、祝う祭りである。このとき、他のささげものとともに二つのパンをささげるように命じられている。普段、神殿で、ささげるパンは、イーストが入っていないものである。しかし、このときだけは、イーストが入っているパンをささげるように命じられているのである。

ユダヤ人の伝統によると、七週の祭りの時は、ルツ記を読むように教えられている。ルツ記には、異邦人であったルツが、ユダヤ人と結婚し、夫がなくなっても、姑とともに、イスラエルの地までついて行く。後に、家系の跡継ぎのために、ボアズと結婚することになり、ダビデ王の先祖になって、さらに、メシアの系図に載った背景が記されている。

聖書的にも、七週の祭りといスラエル人がシナイ山でトーラーが授けられた時期と一致している。シナイ山で、トーラーが授けられる際、ショウファル(角笛)の音が大きく吹き鳴らされる(出20章)。ラビたちは、このときの音が70であったと説明しながら、70と言うのは、諸国を意味すると説明する。そして、トーラーがイスラエルの民に与えられたのは、諸国に伝えるためであると教えている。聖書を調べても、エジプトから出る時、イスラエル人の群れの中には、異邦人も含まれている。また、シナイ山でも、イスラエル人と異邦人がともにいたのである。

七週の祭りにささげる二つのイーストが入ったパンは、まさに、シナイ山でトーラーを受け取ったイスラエル人と異邦人のシンボルのようである。聖書では、イーストと言うのは、罪をあらわすものとして使われることが多い。つまり、イスラエル人も異邦人も、主の前では罪人である。イスラエル人だから、もしくは、異邦人だからという区別はない。誰でも、メシアの尊い血潮なしでは、救いはないのである。また、救われた者として、神の御教えに従って生きるのも同じである。

出エジプトからシナイ山にいたるまでの中に描かれている、一つ比喩的ことは、我々に、明らかにイスラエル人と異邦人が一つになっていることを教えているように、パウロは、エペソ2章で、メシアによってユダヤ人と異邦人は一つになったと教えている。

さらに、七週の祭りで注目すべきことは、レビ記23:22に記されていることである。ここには、畑の隅にある穂は、貧しい人々や異邦人のために残しておくように命じられている。これは、聖霊の降臨後、霊的に貧しい人々、また、世界にいる真の神を知らない人々へ、トーラーのゴールである、メシアである主イエスの福音を、伝えることとして描かれているのである。

七週の祭りは、奇跡やしるしを教えることだけではない。もちろん、神が、働いてくださるとき、我々は、すばらしい神の臨在の中で、いろいろな奇跡やしるしを体験する。しかし、このような奇跡やしるしがおこることは、単なる珍しい出来事を体験することだけで終わるとすれば、それは、神の御心ではない。主イエスは、奇跡やしるしを行われた目的は、一言で言えば、主イエスの神性を人々にあらわすためであったと考えられる。それは、主イエスご自身が、メシアであると言う証明である。ヨハネ

による福音書は、七つのしるしをとおして、主イエスがメシアであることを説明している。また、主イエスの弟子たちが行なった奇跡やしるしも、彼らが伝えるメッセージに、メシアである主イエスの権威があることと、彼らの働きが、神から来ているものであることを証明しているのである。

しかし、主イエスや弟子たちが行なった奇跡やしるしは、そのまま終わったわけではない。そのような奇跡としるしは、正しいトーラーを伝えることにつながっている。そして、来るべきメシアの再臨を待ち望みながら、神の民としてトーラーライフスタイルの中で、生きるように励ましているのである。ということで、トーラーに基づいた、聖霊の働きこそ、七週の祭りが与える本来の意味であると思うのである。それが、主イエスの時代に起こった、メシアニック・ムーブメントである。主は、そのような働きを、今日に起こしていらっしゃるのである。